



A DAY of 「こよみのよぶね」

記者たちが見つめた「こよみのよぶね2023」

2023年12月22日冬至、長良川右岸プロムナードを中心とした河畔一帯にて「こよみのよぶね2023」が開催されました。1月から12月までを示す月行灯が川面を照らしはじめたころ雪が川原に積もるほど降り、18年目にして初めての雪のなかの「こよみのよぶね」となりました。明後日新聞・岐阜支局版・第3号は、そんな「こよみのよぶね2023」を総力特集します。

無料配布

2月20日(火) 第3号

岐阜

明後日新聞社

岐阜支局

www.asatte.jp

発行元: 明後日新聞社 岐阜支局 asatteshinbun.gifu@gmail.com

〒500-8368 岐阜県岐阜市 宇佐 4-1-22 岐阜県美術館

社主: 日比野克彦

くながラーメンバーから名前を募集しSNSで来館



原画イラスト

その日初めて会った人たちの阿吽の呼吸で粛々と作業は進み、思うより早く月行灯、干支行灯も指定の場所に並んだ。職人さんが一つずつ行灯を確認し、強度不足箇所を指示していく。その神強、知紙破れの修正が川原でテキパキ進む。続いて行灯を船に固定するためのロープを職人さんの指示で結びつけ準備が進む。



前日のうちにホテルパークさんの駐車場にそれぞれ製作場所から運び込まれた月行灯、干支行灯などを運び出し川原に降ろす。駐車場の天井が低いので腰をかかめこの搬出、それぞれ思いが込められた行灯。自然に丁寧な作業になる。そのまま堤防を越えて川原へ。2、3人が上で支え堤防を越え川原へ1、2mの落差がある。急勾配の斜面に2、3人が立ち受け取る。もし落としたら、どこかに引っぱれたら、さっか

7時20分 月行灯、干支行灯の準備

と日比野館長が挨拶。月行灯を船に載せ固定する職人さん7人の自己紹介と作業の段取りの説明があり朝ミーティングは終了。いよいよ作業開始。



6時50分 朝ミーティング

冬至の朝、気温はマイナス2度、前日までの天気予報は雪予報は当たらず晴れやかな空、ほっとした。集合時間は午前7時、その10分ほど前に到着。すでに「こよみのよぶね」総合プロデューサーである日比野克彦さん(岐阜県美術館館長・東京芸術大学学長 以下、日比野館長)はあだやかな表情で談笑されていた。東の空は明るくなり世界が鮮明になっていく。集まったのは20人ほど、陣の真ん中に置かれたスモカからラジオ体操の音楽が流れ、号令で皆で身体を動かす。「こよみのよぶね2023」当日がスタートした。

2023年「こよみ」は、岐阜市役所、メディアアコースト、岐阜県美術館の3か所で集められた。その全て、おおよそ500枚が月ごとに一本の麻ひもに丁寧に繋がっていく。誰かの7月の想いが誰かの7月の想いと繋がる。誰かの11月の想いが誰かの11月の想いと繋がる。

10時30分 「こよみ」が繋がる

船頭さんが屋形船を動かして指定の場所に停泊。月行灯は職人さんの合図で持ち上げられ屋形船の屋根の上に待機した職人さんに渡され見栄えよく向き位置が調整され、固定される。それぞれの月行灯が凜と立ち青空に映え美しい。



(加納)

10時00分 まさかの目立ち

「おが卯」の目付けが完了したタイミングで日比野館長が登場、「こよみ」には見えないなあ、目はもって立ってほしいなあ。まさか目立ち立ってよー！と叫び立ち上がる。土壇場での目取り付け大改修、立てる？どうやって... 割竹を4本合わせて支柱をつくる。この2本を頭から足先へ通し目を固定する。そのそのアイディアではあったが、思うより見事に目がピンと立って安心。さらにこの支柱の効果で「おが卯」ががっちり補強された。



(加納)

9時00分 月行灯、舟に載る

者さんの投票で「おが卯」が決まった。今年と来年のはざまで人々の気持ちを込める。誰もが「おが卯」から名付けられた。(以下、干支行灯は「おが卯」と表記します。)

13時00分 午後の準備

お風のミーティングが終了し、川原に戻ると「おが卯」が少し離れた場所から船にロープで繋がれているではないか！ 風も種々かかった。たので、大丈夫と思ったのですが、風で飛ばされたところを船仲間が救っていただいたのです。感謝です。「おが卯」は、こよみさん。



のミーティングで当日の役割分担が決まる。「こよみ」は、おが卯さんと一緒にその仕事を担う卒人(おが卯)は、月船に乗る人、会場警備が立候補が決まっています。「こよみのよぶね」はその場に集った人たちの想いで進む。

11時30分 ランチミーティング

月行灯を観覧船に載せる作業は午14時頃開始、11時30分から風食をとりながらのミーティングが知やかに始まった。日比野館長のあいさつ、月行灯の制作者さんの4人紹介、行灯に込めた想いを語り拍手に包まれる。こよみ



卒人衣装作り

卒人の衣装作りが始まった。卒人は「こよみ」けいれん「で」巫女の面側に立ち、こよみけいれん月舟に託す重要な役割を担っている。彼らの衣装をつくる。材料は、月船を作った色とりどり

記者たちがそれぞれの視点から見つめた「こよみのよぶね2023」の姿と想いを綴ります

「卒人」になった

「卒人」は、「こよみっけ!! 渡しの儀」において巫女を守り、その指示に従い月船に「こよみっけ!!」を渡す重要な役割を果たします。ランキミーティングの席で、うっかり「卒人」の大役を引き受け、その任を務めました。そんな様子をレポートします。

卒人衣装はオーガーマイドです。武骨な私にピッタリに仕上がるように採寸から始まりました。材料は月行灯用に染められた美濃和紙のはぎれ、その風合いを活かし丁寧に縫い上げられ、うっとりするほどに素晴らしい出来栄でした。わずか2時間でこれを仕上げるには「～ながラー・衣装キーム」に拍手喝采です。しかもデザインが力強い、巫女を守るにふさわしい。自分では着られないので着せていただき至れり尽くせり。嬉しいやら恥ずかしいやら子どものころに戻った気分になりました。

衣装を纏うと、中身はただのオッサンでも不思議と身が引きしまります。まさに「馬子にも衣裳」、岸で卒人の相方さん、主役の巫女さんと並ぶと普段とは違う自分を実感、多くの視線を集め(巫女さんで衣装のおかげですね)カメラのシャッター音に包み込まれ心は周りに聴こえるほどに高鳴った。本番を前に「卒人」の先輩からレクチャーを受けリハーサル。相方と二人で動きを再確認し本番を待つ。出航の頃から舞い始めた雪が本降りになった。異世界を思わせるかのように降り続く雪の中、灯った月行灯、「ねが卯」がより幻想的に映る。この夜に向かい仲間が集い繋がり取り組んだ行灯製作の思い目の前の光景と重なり、一層素敵になった。今年の「こよみのよぶね」は特別だ。

いざ本番、ゆったりとした時の流れを表すかのように鳴っていた太鼓の音が勇壮に転調し1月の船がやって来た。巫女が一步を踏み出し、それに従う。降りて行く階段は暗く、雪で滑る。一歩ずつしっかり踏みしめながら、相方とアイコンタクト、巫女の歩みにシンクロする。きっと美しい。二本の卒先に結ばれた大事な想いの「こよみっけ!!」を船に届ける。風が強まり雪は真横に降る。「こよみっけ!!」がちぎれるほどにはためく。次の瞬間、二人の船人が両手でしっかりと受け止めた。船に無事に結び付けられるのを見届け踵を返した。岸を離れて行く月船の太鼓の音が背中を押す。二月の「こよみっけ!!」に向かい階段を上る。階段の上には「～ながラー」の仲間が待機し、卒先に次の「こよみっけ!!」を結んでくれる。風と雪はさらに強まり呼吸さえ妨げる。それでも乱れることなく進む。(松本)

こよみのよぶねを見送った

この日、5時間川岸に立っていた。「こよみのよぶね」をおくる日だ。一年の数々の出来事を思い返し、心の底に沁んだ記憶の断片を思い浮かべる。少しだけ時を経たことにより、当時の心情が味わいになったりもする。冬至の日改めて振り返ることが、今年出会ったことや得た気持ちを意味づけるきっかけにもなる。「こよみっけ!!」には多くの人が文として残した記憶が書かれ、一年の終りの時期にそれらを乗せその記憶を流す。

「おくる」行為は、新しい年への「空白」に変わる。陽が沈む頃を待ち、一連の行いは始められる。時を待つことは情緒的な揺らぎの始まりでもあった。ひたひたと美しさを感じた。しかし寒かった。

空模様が時の流れと共に変わる。キラキラと儚く降り出した雪が身体に打ちつけるような雪に変わる中、恒例の「こよみのよぶね」一連の動作が執り行われていく。ゆるゆると。

船には「こよみっけ!!」のほか12の月を表す数字の行灯が載る。それらを作成した各キーム、夕刻の陽のあるうちに取材を試みた。10分足らずの会話の中で交わした言葉には「行灯づくり」に向かう心模様や人ひとり複数名の物語が垣間見られた。それが幾重にもなる。それはキームの物語になると受け取った。これは簡単にまとまるものではなく更に綴るものだ。こうした取材もあり雪降る川岸に立ちつづける必要が加わった。ちゃんと見て、しっかり船をおくろうという思い。

年中行事や地域行事には、由来、伝統、伝承がある。何故行うかを秘めた真のところが、「こよみのよぶね」はこの地で共生している人やモノの思いを知る行事だ。終始し始めて体験した私にとって岐阜を知り、毎年関わりたい行事となった。(多田)

雪の中、船を眺めていた・・・

16時頃、観覧船のりばへ訪れる人がたくさん集まっています。大きなカメラを持った方、防寒着をしっかりと身につけた方、行灯の制作に取り組みされた団体の方々やふらっと立ち寄ったみたいなお客まで。皆1から12の月行灯とうさぎの干支行灯を眺めながら語り、点灯するのを今か今かと待っていました。

16時30分から行われた点灯式では、日比野さんの合図に合わせて点灯するはずが同時に灯らないイプニングもありましたが、どうにか無事に全てが灯って安心しました。徐々に空が暗くなり、行灯の灯りが長良川に浮かび上がります。点灯式を終えた月船は、干支舟のうさぎを追いかけるようにして1から順番に動き始めました。いってらっしゃいって見送りながら、観覧者も歩いて長良川ロードへ移動します。その際に長良橋から見えた月舟もとても綺麗で、流れる風景をじーっと見たい気持ちになりました。

当日の天気予報は雪。日中は快晴だったのに関わらず、夜は極寒で風もありました。18時を過ぎた頃にはよいよ雪が降り始めましたが、こよみのよぶねは穏やかに進行されました。背景にあった金華山と岐阜城が見えなくなるほど吹雪くと、参加者は「うう寒いぞ。でも、まさに“冬至”だね。」と特別な寒さにも層を感じて楽しんでいました。月船にはそれぞれ行灯制作に携わった方が数名乗っていて、船を岸に寄せる時、巫女と付きの卒人が想いを寄せながら「こよみっけ!!」を月船へ受け渡していきます。観覧者たちはその姿を目に焼き付けながら、心地よいアウンスとしても各月にあった出来事を思い浮かべていました。儀式は順調に進みましたが、あまりにも吹雪くので頭や肩には雪が積もってしまい、人々はまるで雪だるまのようになっていました。

私の書いた「こよみっけ!!」はあの船に無事に乗ったかな。2023年はもうすぐ終わってしまうけれど、この一年いろいろなことがあってたくさんの人と出会ったな。あんなことやこんなこともしたっけ…!

2024年の今頃は何かをして過ごしているのだろうか…?冬至の夜、今年への想いは自分が思っているよりも大きく膨らみ、そして来年への期待が広がっていくんですね。「今年もありがとうね。来年もまたよろしくお願ひします。」年の瀬の挨拶もいつもよりちょっと特別に感じた夜でした。(中野)

私の感じた「こよみのよぶね」の4年間、私的に詩的に

私は岐阜県美術館「～ながラー」としての3年間、干支行灯制作に携わりました。「～ながラー」の任期を終えた2023年、干支行灯作りから離れましたがメンバーの一員として参加しました。毎年、キモキモも変容していく「こよみのよぶね」。そんな私が感じた4年間の「こよみのよぶね」を伝えます。

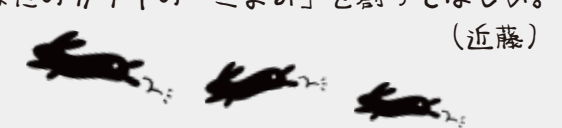
1年目。「こよみのよぶね」? 地元だけど、見知らぬ人に見知らぬ場所。知らないからこそその好奇心、巫女役をやってみた。山に川に人!はじめて岐阜を感じられた子年の「こよみのよぶね」。

2年目。知って、懂れて、自分も創りたくなった。一緒にやってくれる人が少なくてシヨボンしたり、一緒にやってくれる人に出会って心癒うれしかったりした丑年の「こよみのよぶね」。

3年目。人と集まってやるもどかしさ、言葉で伝える難しさ、モヤモヤ。「こよみのよぶね」の好きなところ、自分が正しいを一度軽やかに手放したら、人と集まってやる清々しさ、言葉じゃ伝えられないことが伝わった気がした寅年の「こよみのよぶね」。

4年目。干支行灯作りから卒業した年。寂しい感じ、もう消えてしまうような・・・。ふっつとこい、そんな事はなかった。どこか面影を感じる新しい形、見覚えのある風景を知っている人と新しい人たちの手で、私と同じキモキモで、全く違うキモキモで、明かりが灯った卯年の「こよみのよぶね」。

毎年、同じはずの「こよみのよぶね」が違って感じたのは心に変容が起きたから。ひとりじゃ起きなかった心の変容。嬉しいことも、モヤモヤすること、四季があるようにうつろいで、「こよみ」を感じる。最初は0でも長良川を流れて消えて増えていく数字。あなたの中の「こよみ」を感じてほしい。ぜひ、あなたのカタチの「こよみ」を創ってほしい。(近藤)



1月船から見た「こよみのよぶね 2023」 — 乗組員体験記 —

記者、加納と高橋は1月行灯の知照貼りを手伝ったご縁で1月船に乗ることになった。もちろんお客さんではなく、乗組員として乗船する。担当する作業は準備と太鼓叩き、「こよみっけ!!」の受け取りだ。準備では豆行灯の飾りつけと配線、月行灯の配線、発電機の運転、太鼓の準備、太鼓の叩き方のレクチャーも日比野館長から直々に受けた。配線が完了した時点で発電機の試運転をする。手間取ることなくエンジンは始動し灯が点ってほっとした。船から降りて雄姿を見る。風間は青空に映えシャキッとかっこよかったが、宵闇に灯りがほんわり点ると、同じ行灯なのに表情が変わった。幽玄に美しい。

船には船頭さんが二人、エンジンを操作する人が二人の計4人が造船し操船する。鵜飼シーズンには観覧船を実際に運航されるプロフェッショナルだ。みなさん気さくでやさしい。17時30分、日比野館長の号令で干支舟「ねがUP」が出港した。続くのは我が一月の船、出航を祝うように、朗らかに高らかに勇壮に太鼓を叩く、エンジン音が高まり船は滑るように本流に向かう。「ねがUP」を追いかけ長良橋をくぐる。振り返れば二月、三月が続く、長良橋の上に多くの人たちがいる。彼らの目にはこの光景はどう映っているのだろう。見あげれば金華山、岐阜城が輝く、川の上は静かだ。エンジン音も自分が叩く太鼓の音さえも空に吸い込まれていくようだ。川の流るも波音もゆるやかに思う。たぶん時の進みも……。感じるままに叩く太鼓の調子は、いつの間にかゆるやかに変わった。

船はゆったり上流に向かって進む、大きく弧を描いて下流へプロムナードの前を行く、たくさんの方が手を振る。長良橋の手前で大きく回ってふたたび上流へ、月船は月の並びで大きな楕円をつくって航行する。空から見たら、それは一年を見せているに違いない。船そのものが時の流れを表現している。「ねがUP」はそんな月船の間を自由に軽快に楽しそうに走る。川面を駆けけるウサギだ。この航行を「顔見せ」と言うらしい。そんなふうに、大きく4、5回、円を描いたのち、右岸から数メートルのところに錨を降ろし、金華山を背にして泊まった。1月から12月の行灯と「ねがUP」が一列に並んだ。「こよみっけ!!」渡しのはじまりをここで待つ「お山下祭屋」だ。プロムナードから眺めるなら「絵になるに違いない」。

「あれ?」何か視線を横切った。雪だ。冬至の夜に雪、「こよみのよぶね」に雪がちらつくなと風情があるなあと雅に思ったのは一瞬、雪は風を従え容赦なく真横に振り出した。気づけば川原はすでに真っ白。観覧船には屋根がある、けれど壁はない。真横に降る雪に屋根は役に立たない。船の中にも雪はどんどん降り積もり一気に5cmを超えた。太鼓を叩く手が凍った。感覚がまるで無くなった。

「こよみっけ!! 渡し」に向かう! 船頭さんに指示が来た。錨をあげ、エンジンが高鳴る。記者二人の胸も高鳴る。太鼓を叩く手の感覚が戻る。感覚よく、朗らかに響け。「すぎ山」の前へ船は雄姿と雪を突き抜けて進む。岸に寄る、巫女が川岸にまっすぐ立っていた。両手を船に向かって広げ伸ばし、想いをささげるように屈む、巫女に合わせて岸二人が先端に「こよみっけ!!」を繋いで結んだ竿を船に傾けた。船に届く、「こよみっけ!!」が乗って来た。岸先からやさしく外す。しっかり握る、落としてはいけない。一月の想いをこの船に載せるんだ。素早く丁寧に屋形船の柱に結ぶ。結べた。強い風、吹きつける雪にも飛ばされることも手切れることもなく、船の柱に結んだ。巫女は向きを変え、岸人を従え階段を上がっていく、ふたたび太鼓を高らかに叩く、船は岸を離れ流れの中央へ、巫女たちの姿が一瞬に小さくなった。船は長良橋の手前で転回し、「お山下祭屋」で待機した右岸を目指す。その先の川の中に人が立っていた。太ももまで水に浸かり懐中電灯を振り停船位置を照らし指示していた。雪と風は弱まることはなく降り吹き続けている。川原はすでに雪原になっている。雪で視界が遮断されるが安全な停船のためのことに違いない。「こよみのよぶね」はいろんな人に支えられている。

● 船頭さんのお話

船が停泊している間、船頭さんから多くのお話を聞いた。「もう30年あまり観覧船に乗ってきた。仕事を始めたころからは、観光客があふれてすごかった。いまでは想像もできない。いつの間にか減りはじめ、コロナで落ち込んで、少し戻って来たけれどさみしくなった。このままでは、伝統漁法としての鵜飼は文化財として保護され継続できるけれど、観光としての長良川鵜飼いは消失してしまうかもしれない。」そんな変遷を淡々と独白のように語ってくれた。その言葉の端々に、ご自身の生業だけではない「鵜飼」への愛情があふれていた。長良川については、「岐阜市の観光資源は長良川が一番だ。街の真ん中にこんな美しい川が流れているのはこ

こだけだ。それをもってアピールしなければ岐阜に観光客は来てくれない。鵜飼シーズンは長良川を感じてもらえるチャンスはある。でも、冬は何もない。だから「こよみのよぶね」はありがたい。「こよみのよぶね」で、こよみに積もるほどの雪が降ったのは初めてだ。最初の年から関わっているけど、初めのころはイベントが浸透してなくて、お客さんもあまり来なかったけど、干支が一回りしたぐらいのころから、冬至といえば「こよみのよぶね」というようにお客さんにも来ていただけるようになったという実感がある。こよみはひどい天気でも吹雪いても、争はんて役にたたないだろうに、冷たいだろうに、あんなふうに見てくれている人がたくさんいる。ありがたいことだ。長良川鵜飼は5月から10月までの時期だけだから、それ以外の季節にこうして鵜飼船を使ってもらうことで、鵜飼の宣伝にもなっていると思うし、ほんとうにありがたい。これからも続いていってほしい。」と感懐深げでした。「こよみのよぶね」をありがたいと思ってくださっているからこそ、18年間船を出してくださっている。価値あることだと実感しました。他にも、ご自身の休業時代のこともふりかえって、「船頭というのは職人だから、昔は修行が厳しかった。今は、そんな風では若い子も育たないし、せっかくやりたいといっただけでもらっているのもあり、頑張って技術を身につけてもらって伝統を引き継いでいってくださるようには指導することをお願いしている。」などなどいっぱいお話を聞かせていただきました。ほんとうに素敵な時間でした。

そんなお話を聞かせてもらっているうちに、突然、発電機がドッドドブツツと止まってしまった。電源消失、すべての灯りが消えてしまった。なんと燃料切れ、えーどうしようと思う間もなく、船頭さんが無線で連絡し、5分もたたないうちに警備艇が到着、燃料缶が届いた。燃料を補給して始動、灯りがふたたび点った。なんという素早さ! いろんな人に支えられている。

「さあ戻ろう」と船頭さんが声をかける。太鼓を打ち鳴らす。錨をあげ戻る。雪は降り続くプロムナード前を行く、誰もが手を振ってくれる。岸、多くの人が駆け寄る。月行灯を降ろす予定だったけれど、屋根に雪があり危険との判断で翌日以降に変更になった。豆行灯、太鼓などがあつという間に船から降ろされた。記者も降りる。船から見上げる月行灯は見事だった。
(加納・高橋)

左義長

2024年1月14日・快晴・気温はマイナス3度。長良天神の境内の水たまりには分厚い氷が張っていた。「こよみのよぶね 2023」を「0(ゼロ)」に戻すにふさわしい朝だ。午前8時、関係者が集り、残念ながら参加できなかった日比野館長からのメッセージを確認。「左義長は0の数字が現れる時、…」

この美しい詩のような言葉を聴きながら、「こよみのよぶね」の準備、「ねがUP」の制作、来館者さんと一緒に楽しんで知照貼り、そして搬出。たくさんの方が想いをこめて「こよみっけ!!」を記していた様子がよみがえった。もちろん当日のこと、夜明け前の美しい長良川、「ねがUP」のまさかの耳立て、目入れで完成した瞬間、目を奪われるほどに美しかった。そして夜、雪が降りだし、吹雪になった。気温はどんどん下がり凍えるなかにもかかかわらず滞りなく執行された「こよみっけ!! 渡し」。ある意味、そんな悪天候さえ構成要素として取込み場の力が結集した「こよみのよぶね 2023」。そんなすがすがしが脳裏を横切った。

神事後、伝統的な火起こしで点けられ燃えあがったお炊き上げのなかへ、地元のみなさんの大切な想い、願いと一緒に行灯「こよみっけ!!」を入れる。炎が高くなった。一気に天に昇り「0」に戻った。「0になれば、みんなに会える。その繰り返しはこよみのよぶね」2024年は……。これをまさに実感しました。
(鳥野・加納)

0に戻す。
1~12の数字と0の数字。
1.2.3.4.5.6.7.8.9.10.11.12は竹と知照で作りました。
左義長は0の数字が現れる時。
0の数字は竹と知照が火に焚かれて煙になって現れる。
0になれば、みんなに会える。
みんなと会って1~12をつくる。
その繰り返しはこよみのよぶね。

日比野克彦



編集後記

第3号のパイロット版を愛読者に読んでもらったところ「疲れた」の一言だった。たしかに1、2号と比べて軽妙さは欠けている。おそらく「こよみのよぶね」が創り出すもの、その場の力が大きすぎて、その全てをほんとは伝えようとする記者たちの熱量のほどばしり、そのあがきが「疲れた」の感想につながったのだろう。お読みくださった皆さんの感想はいかがだったでしょうか? なんかつごいね! 今年の冬至、「こよみのよぶね 2024」に行ってみようかな? と思っただけならば幸いです。(編集長 加納)